

1 「制御工学」補足資料

1.1 たたみ込み (合成積)

実数の全領域 $(-\infty, \infty)$ で定義された 2 つの関数 f, g に対して、**たたみ込み** $f * g$ を次式で定義する。

$$f * g = \int_{-\infty}^{\infty} f(t - \tau)g(\tau)d\tau \tag{1.1}$$

ここで、

$$\int_{-\infty}^{\infty} f(t - \tau)g(\tau)d\tau = \int_{-\infty}^{\infty} g(t - \tau)f(\tau)d\tau \tag{1.2}$$

より、一般に次の関係が成り立つ。

$$f * g = g * f \tag{1.3}$$

たたみ込み $f * g$ は、式 (1.1) の場合、変数 t の関数であり、正式には $(f * g)(t)$ と書く。しかし、変数の名前は式より明らかであるので、この資料では簡単に $f * g$ と書くことにする。

結合律 $(f * g) * h = f * (g * h)$ も成り立つなど、たたみ込みは積の性質を持ち、合成積とも呼ばれる。

1.2 フーリエ変換におけるたたみ込み

実数の全領域 $t: (-\infty, \infty)$ で定義された関数 $f(t)$ に対するフーリエ変換 $\mathcal{F}\{f(t)\} = F(j\omega)$ を次式で定義する。

$$\mathcal{F}\{f(t)\} = F(j\omega) = \int_{-\infty}^{\infty} f(t)e^{-j\omega t}dt \tag{1.4}$$

フーリエ変換 $F(j\omega) = \mathcal{F}\{f(t)\}, G(j\omega) = \mathcal{F}\{g(t)\}$ が存在すれば、たたみ込みのフーリエ変換について

$$\mathcal{F}\{f * g\} = \mathcal{F}\{f(t)\}\mathcal{F}\{g(t)\} = F(j\omega)G(j\omega) \tag{1.5}$$

が成り立つ。

たたみ込みは、フーリエ変換により通常の積になる。証明は応用数学の教科書を参照のこと。

1.3 ラプラス変換におけるたたみ込み

ラプラス変換においては、たたみ込みの対象となる関数 $f(t), g(t)$ の $t < 0$ おける値はいずれも 0 である。すなわち、

$$f(t) = \begin{cases} 0, & t < 0 \\ f(t), & t \geq 0 \end{cases}, \quad g(t) = \begin{cases} 0, & t < 0 \\ g(t), & t \geq 0 \end{cases} \tag{1.6}$$

この点を考慮すると、ラプラス変換におけるたたみ込み $f * g$ は次式で表される。

$$f * g = \int_0^t f(t - \tau)g(\tau)d\tau = \int_0^t g(t - \tau)f(\tau)d\tau \tag{1.7}$$

たたみ込みを用いて、線形システムの入出力関係は、次のように表される (教科書 p.23, 式 (2.76))。

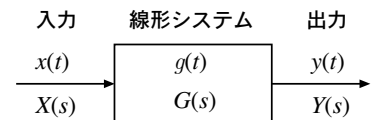
$$y(t) = g * x = \int_0^t g(t - \tau)x(\tau)d\tau \tag{1.8}$$

ここで、 $x(t)$ はシステムへの入力、 $g(t)$ はシステムのインパルス応答、 $y(t)$ はシステムの出力である。この式の両辺にラプラス変換を施すと、次式を得る (教科書 p.24, 式 (2.78))。

$$\mathcal{L}\{y(t)\} = \mathcal{L}\{g * x\} = \int_{t=0}^{\infty} \int_{\tau=0}^t g(t - \tau)x(\tau)e^{-st}d\tau dt \tag{1.9}$$

この式が、フーリエ変換の場合と同じ結果 (式 (1.5) に相当) になることを以下に示す。

実際、因果的 (物理的に実現可能なシステムでは、インパルス応答は必ずこのような性質を持つ。



まず、 $\mathcal{L}\{x(t)\} = X(s), \mathcal{L}\{g(t)\} = G(s), \mathcal{L}\{y(t)\} = Y(s)$ とおく。計算するたたみ込みのラプラス変換は、

$$Y(s) = \mathcal{L}\{g * x\} = \int_{t=0}^{\infty} \int_{\tau=0}^t x(\tau)g(t-\tau)e^{-st}d\tau dt \quad (1.10)$$

この積分の積分範囲は、 $0 \leq t \leq \infty$ かつ $0 \leq \tau \leq t$ である (図 1(a) の網かけ部)。

次に、積分の順序を入れ替え、図 1(b) の数字に示す順に積分を行う。図 1(b) から、積分変数 t の下端が $t = \tau$ 、積分変数 τ の上端が $\tau = \infty$ になることに注意すると、式は、

$$\mathcal{L}\{g * x\} = \int_{\tau=0}^{\infty} x(\tau) \int_{t=\tau}^{\infty} g(t-\tau)e^{-st}dt d\tau \quad (1.11)$$

となる。

さらに、変数変換 $t' = t - \tau$ を行うと、積分範囲は図 2(a) の網かけ部から図 2(b) の網かけ部に変換される。積分範囲が、 $\tau : [0, \infty), t' : [0, \infty)$ に変わることには注意すると、最終的に以下の結果を得る。

$$\mathcal{L}\{g * x\} = \int_{\tau=0}^{\infty} x(\tau) \int_{t'=0}^{\infty} g(t')e^{-s(t'+\tau)}dt' d\tau \quad (1.12)$$

$$= \int_{\tau=0}^{\infty} x(\tau)e^{-s\tau} \int_{t'=0}^{\infty} g(t')e^{-st'}dt' d\tau \quad (1.13)$$

$$= G(s) \int_{\tau=0}^{\infty} x(\tau)e^{-s\tau}d\tau \quad (1.14)$$

$$= G(s)X(s) \quad (1.15)$$

すなわち、**たたみ込みのラプラス変換は、それぞれの関数のラプラス変換の積である。**

$x(\tau)$ と $g(t - \tau)$ の積の順序を入れ替えている。

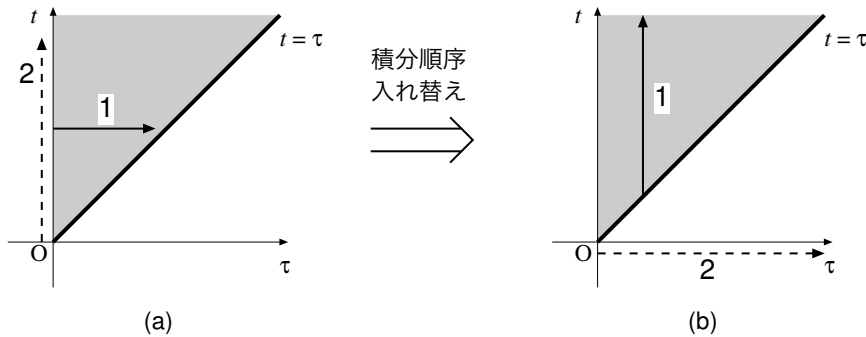


図 1: 積分順序の入れ替え

重積分の積分順序の入れ替えや変数変換には、十分に気をつかう必要がある。

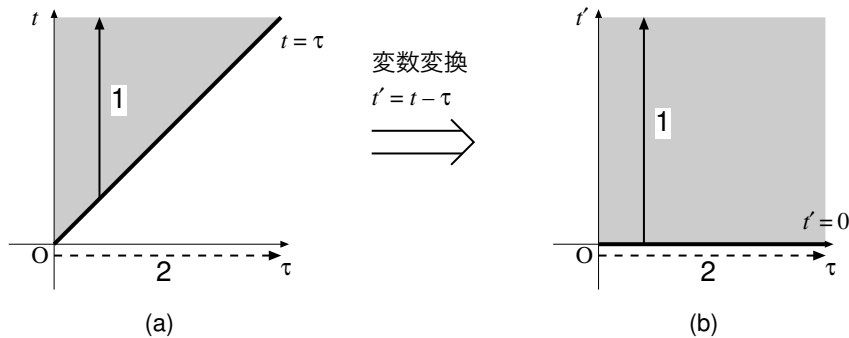


図 2: 変数変換 ($t' = t - \tau$)